子どもが好き、子どもが趣味、子育てを楽しんできた人生

マイプライベートタイム

町田市長（東京都）　石阪丈一（いしざかじょういち）

東京郊外のベッドタウン、町田市。東京への通勤圏の各都市と同じように、高度経済成長期に、住宅開発を中心として発展したまちです。高度成長期のはじめ、昭和33年2月に、1町3村の合併で町田市が誕生しました。古くから鉄道の利便性の高い土地で、横浜線が明治41年に、小田急線が昭和2年に開通し、町田で交差する、鉄道の結節点をなしてきました。鉄道は、今日の町田が、商業拠点として発展してきた大きな要因になっています。

茅葺き屋根の家に生まれて

私は、旧1町3村の一つ、鶴川村の旧家、といっても、没落地主の家に生を受け、学生時代まで住んでいた家は、江戸時代のはじめ、17世紀中葉に建てられた茅葺きの家でした。わが家の敷地内には、禅寺丸柿を始め多くの樹木、草花があり、野鳥も昆虫も身近にあふれていました。そんな環境の中でおのずと、野鳥を見ること、絵を描くことを始めました。

アトリの群れの木版画。晩秋の福島県南会津にて

エゾライチョウの木版画。北海道にだけ生息するライチョウ

（公財）日本野鳥の会に入会し、野鳥観察のリーダーの仕事（ボランティア）や自然保護の活動を一種のライフワークとして続けてきました。鳥の絵を描くうちに、木版画（多色刷り）の年賀状を出すようになり、かれこれ40年続けています。

大分県臼杵市での、日本フットパス協会の大会でのエクスカーション（臼杵の石仏）

民間企業の社員から学ぶ

大学を出て就職したのが横浜市役所。係長になって、当時の経済企画庁関係の特殊法人、総合研究開発機構に出向しました。ここで、最初の民間企業の組織風土の洗礼を受け、3倍速の業務処理のスピードについていくのが精いっぱいでした。仕事の処理が並行処理であり、マルチに進める方式に比べ、役所流の、一つの決定を踏まえてから次の工程に進む方式が、いかにスピードが遅くビジネスチャンスを逃しているかを痛感しました。

部長への昇格を機に、（株）横浜国際平和会議場へ出向しましたが、企業経営を学びつつ、黒字化を目標に、日々の会社全体のマネジメントに悪戦苦闘する毎日が始まりました。

大げさに言えば、24時間ずっと、仕事のことを考えるようになりました。それから今日までずっと、市長になってからは当然のように、夜中に仕事を思い出す生活に変わりました。

市内の企業の社長にこの話をしたら、「そんなの当たり前だよ」と言われてしまいました。

尾瀬ヶ原の西側にそびえる、至仏山（しぶつさん）に登頂する筆者

望遠鏡を持ってバードウオッチングを楽しむ筆者

月に2、3回玄関の迎え花を活けます（流派は小原流）

アップルパイの飾りは木の葉をあしらっています

町田市役所は２０１０年度から、企業会計方式・複式簿記に移行しました。わが国の全市町村で初めての導入です。

全ての事業のコストを配分する、人件費も、減価償却費も、場合によっては借入金利コストも各事業に配分していきます。これによって、各課のマネジメントにも活用できるだけでなく、議会や市民説明にも有効に活用しています。なんといっても、企業の経営者や一般の市民は官庁会計での説明など、会計言語が違うので何のことか分かりません。説明責任以前の問題です。

企業型のマネジメントはこれにとどまらず、市役所の勤務時間についても、それまでの8時30分出勤を8時20分に、就業規則を変え、全職場で朝礼・打ち合わせの後に、窓口対応を始めるようにしています。朝、お客さまの市民と職員が同じエレベーターに乗ったり、階段を一緒に上ったりなどという光景はずっと昔のことになりました。

子ども好き、子育てを楽しむ

さて、最もプライベート・タイムなのは、家族のことです。中でも、3人の子育てはかなり力を入れた記憶があります。というより、ワークライフバランスとなれば、若い頃は「ライフ最優先」で、特に、子どもが0～1、2歳児のころは、「残業はしない」「マージャンや居酒屋は一切付き合わない」で通しました。周りからは、生意気で、付き合いの悪いやつという烙印（らくいん）を押されていました。

子どもがまだ中高生のころは、よく、お店屋さんごっこをしていました。毎週末は、すし屋さんやてんぷら屋さんをやり、顧客（カミさん、子ども）の注文に合わせて、握ったり、揚げたりする役をやります。お金がないので、すし屋やてんぷら屋に連れていくことなどできるはずもなく、考え出したのが、この、お店屋さん「ごっこ」というわけです。「ごっこ」だけでなく、やはり週末は、本格的に夕食の支度も担当していました。

孫ができてからは、盆、正月に5人の孫が来るたびに、ケーキを焼いて振る舞っています。パウンドケーキ、チーズケーキ、カスタード入りのアップルパイなどは人気メニューです。

さて、またまた、仕事の話になってしまいますが、町田市は、国連のUNICEFが進めている、CFCI（Child Friendly Cities Initiative）「子どもにやさしいまちづくり事業」の、日本における五つの「ユニセフ日本型CFCI実践自治体」の一つとして活動しています。また、本年度は「（仮称）子どもにやさしいまちづくり条例」の制定を目指しています。児童館も2、3年に1館ずつ建設しています。子どもの居場所については、ほかにも、冒険遊び場を数多く整備しています。

子ども施策について多くを記す紙幅はありませんが、筆者自身の子ども好き、子育て経験をそのまま、市政の重点事業にしてしまったような感があります。

子ども施策を積極的に展開してきたのは、決して自分の趣味を押し付けているわけではなく、若いころから思っていたこと、日本の社会に求められている、子ども中心の施策をもっと展開すべきと思ってやってきたつもりです。

2019年10月、ケルンで開かれたCFCサミットにて（右側手前に筆者）